

見方・感じ方の特性に合わせた支援

～一人一人に合わせた伝え方～

新潟県三条市立裏館小学校 教諭 樋 熊 則 子

1 はじめに

学校生活の中で、集団適応が困難なために発達障害通級指導教室を希望する児童が増加している。

生活科の観察カードに何を書いたらよいか分からずに1時間じっとしていた、体育が苦手だからやりたくないと怒ったというような状況が見られることから通級を開始した児童がいる。通級教室でやらない訳を尋ねると「発見したことはない。そんなの当たり前。」「なぜ、体育をするのか。」と返答していた。このように、その子らの視点と周りの視点のわずかな違いが、学校生活を困難にしていることが多い。

また、自分で決めたことが予想と違う結果になったり、予期せぬことが起きたりすることで不安になることもある。不安や困っていることを伝えるスキルが未熟なため、泣くことや怒ることで表現したことで、トラブルになってしまうこともある。

この子らの視点に合わせた伝え方をすることで、「知らなかった」、「わかった」、「やってみる」とつなげ、「できた」経験をたくさん積み重ねていきたい。

2 実践の概要

(1) 指示理解の受け止め方の違いを理解する。

教師が指示したことがイメージできなかつたり、言葉をそのまま受け取ったりする実態を理解する。

(2) 見る視点、考える視点を具体的に提示する。

活動することを1つに絞ったり、注目する場所を限定する。また、具体的な数値や色で指示する。

(3) 活動への動機付けをする。

活動に目的をもつことが出来ないときに、活動に取り組むことで良いことがあるという状況を設定する。

(4) 活動の流れのパターンをたくさん作る。

自己選択・自己決定したことが、予定通りにいかないこともある。予定通りにいかなかったときの行動をいくつかシミュレーションする。

(5) 自己評価・担任評価をして、スキルの定着を図る。

評価の基準を決めて両方で評価し、スキルの定着を図る。自分では「できた」と感じていても、担任からの評価と違うこともある。評価のズレを埋めていく。

3 まとめ

一人ひとりの受け止め方を理解することで、できなかった原因が分かり、この子らの視点に合わせて伝えることで、「そういうことだったのか。」「わかった。」「やってみる。」という言葉が聞かれるようになった。できなかったのではなく、やり方を知らなかったことがこの子らの生活を困難にしてきたと言える。

曖昧な言葉や抽象的な言葉では、理解できない状況にいる彼らを「どうして分からないのか」と考えるのではなく、伝わる言葉を常に考えていきたい。